

研究ノート

アマタリアン／アマタリアニズム試論

-リバタリアニズムとコミュニタリアニズムが止揚された第三の道-

池上 宏之*

A tentative assumption of Amitarian/Amitarianism

-The third way which is sublated Libertarianism and Communitarianism-

IKEGAMI Hiroyuki

論文要旨

本稿では、正義論・政治哲学における、リバタリアニズムともコミュニタリアニズムとも異なる第三の道「アマタリアニズム」についての立場設定を試みる。同時に、「アマタリアン」という概念が誕生した経緯についても説明する。リバタリアンがリバティ Liberty つまり自由を価値観の中心に据え、コミュニタリアンがコミュニティ Community つまり共同体を価値観の中心に据えていることに対して、アマタリアンとはアミティ Amity つまり人間関係を価値観の中心に置く人々のことである。

キーワード アマタリアン、アマタリアニズム、リバタリアン、コミュニタリアン、和辻哲郎

Abstract

In this paper, I will attempt to set up a position on “Amitarianism,” the third way of thinking about a justice theory and political philosophy different from Libertarianism and Communitarianism. At the same time, I will explain how the concept of “Amitarian” came into being. While Libertarian places liberty, or freedom, at the center of their values, and Communitarian places community at the center of their values, Amitarian puts amity, or relationship, at the center of their values.

Keywords: Amitarian, Amitarianism, Libertarian, Communitarian, Tetsuro Watsuji

* 会社員 ; 1494tordesilhas@gmail.com

1. はじめに：アマタリアン誕生の経緯について

まず、「アマタリアン」という新しい概念が誕生した経緯について説明しよう。英単語のアミティ Amity は「友人関係」「親善」といった意味で、元はフランス語からの借用語である。本論考ではアミティという語を「人間関係」という意味で用いる。

この着想の元となったものは、大阪大学大学院人間科学研究科（共生社会論）教授の稲場圭信氏による次の叙述への、筆者の応答であった。

今、リバタリアン（個人・経済の自由と権利を主張）とコミュニタリアン（「共同性」や「共通善」を主張）の対立がある。筆者は、デュルケム社会学、そして、コミュニタリアン（ベラー、マッキンタイア、サンデル）の流れから、更にネオ・コミュニタリアンともいうべきバランスを考えた中道、従来型の村社会、北米・ユダヤ・キリスト教的共同体（結束型ソーシャル・キャピタル）ではない「無自覚の宗教性」を含みこんだ「つながり」（橋渡し型ソーシャル・キャピタル）による利他主義・共生社会論を主張している。（稲場 2020:195-196）

筆者は学生として、ゼミ形式の講義の中で上記の論文全てを読み、その講義の教員の一人でもあった稲場氏本人に論文の感想を述べた。稲場氏は自身の立場について、ネオ・コミュニタリアンという言葉で表現していたが、筆者はその表現とは別に、「つながり」を重視する立場ならば、つながりを表すアミティを使ってアマタリアンというのはどうだろうかと提案した。

この時筆者は次のような図を使って、リバタリアンとコミュニタリアンとアマタリアンのそれぞれの立場を図示した（図1）。

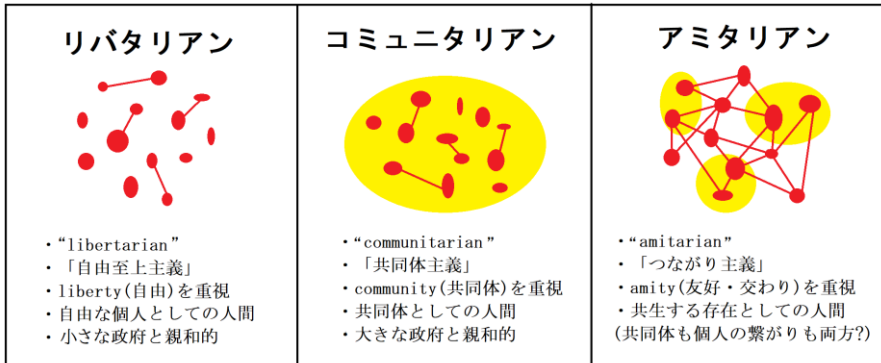


図1：3つの政治哲学の立場⁽¹⁾

これらの図の中で、赤い点は個人、黄色い領域は共同体、そして個人と個人を結ぶ赤い線は人と人とのつながりである。要するに、個人の自由 Liberty を重視するのがリバタリアン Libertarian で、共同体 Community の共通善を重視するのがコミュニタリアン Communitarian だが、そのどちらでもなく、人と人とのつながり、つまりアミティを重視するのがアマタリアン Amitarian ということである。

また、筆者がアマタリアンという造語を発表した講義には、稲場氏と同じ共生社会論所属の志水宏吉氏も参加していたが、後に志水氏は著書の中でこのアマタリアンのアイデアを紹介して下さった。志水氏の専門である教育社会学の視点からのアマタリアンへの言及である。

個人の自由 (liberty) に自閉するのではなく、かといって共通善の源になる所属集団 (community) に埋没するのでもない第三のあり方を、彼は友人関係 (amity) という英単語に託し、アマタリアンとした。端的に言うなら、アマタリアンとは、周囲にいる人たちや外部にいる人たちと自由闊達につながることができる、柔軟かつタフな精神をもつ人たちのことである。アマタリアンは、孤立した「個人」ではなく、また共同体に縛りつけられた「人間」でもない。賢さとしなやかさとたくましさや併せ持つ「人」である。自分がかかわる一人ひとりの個性や気持ち

を大事にしながら、地域や家族がもつ伝統や縦のつながりもおろそかにせず、横の、あるいは斜めの人間関係を着実に築いていける人、それがアマタリアンである。アマタリアンは、自分のまわりに「アミ」＝ネットワークを築ける人でもある。そのネットワークは、それを構成する諸個人にとっての物質的・精神的な「セーフティーネット」たりうるであろう。(志水 2020:202)

筆者の着想を基にしながらも、より豊富な含蓄がある指摘を志水氏は行っている。まず、「アマタリアンとは、周囲にいる人たちや外部にいる人たちと自由闊達につながるができる、柔軟かつタフな精神をもつ人たちのことである」とあるが、筆者はここまでの指摘はしていなかった。この表現はアマタリアンのあるべき姿を見事に表現している。様々な立場の人とコミュニティを跨いでつながることができる存在というアマタリアンの具体像が、この記述から生き生きとイメージできる。

これに続く「アマタリアンは、孤立した『個人』ではなく、また共同体に縛りつけられた『人間』でもない。賢さとしなやかさとたくましさを併せ持つ『人』である」という箇所にも、多くの示唆が含まれている。志水氏は個々の人のことを「個人」、共同体に縛り付けられた人のことを「人間」、そうではなく個性を大切にしながらも人とのつながりも疎かにしないアマタリアンのあり方を「人」とそれぞれ呼んでいる。つまり、「個人」「人間」「人＝アマタリアン」という形で三者を分類している。驚くべきことに、この箇所で叙述されていることは、和辻哲郎の思想と極めて親和性が高いのだ(この点については第3章で詳しく論じる)。

2. ヘーゲルの弁証法について

この章では後に扱う和辻の思想の前提となる弁証法について確認したい。

ここでの弁証法とは、19世紀ドイツの哲学者であるヘーゲルの弁証法を指す。一般的にはヘーゲルの弁証法は、ある命題(正/テーゼ)と、それに反する命題(反/アンチテーゼ)が矛盾を解消すること(止揚)により、さらに発展した命題(合/ジンテーゼ)に至るというような解釈をされることが多い。つまり弁証法は「進む」ものであるという解釈が流布している。

しかし、ヘーゲル研究を専門とする大阪大学大学院人間科学研究科(比較文明学)准教授の野尻英一氏はこの解釈を真っ向から否定し、弁証法は進むものではなく、むしろ「暗黙に為されている前提に逆行する」こと、つまり、戻るものであると指摘する。野尻氏は「AがAであることの〈真理〉はAがAではないということである」というのが弁証法の本来の意味であるとし、それを次のような例え話で説明する。

たとえば居酒屋でAという男が酔っていて「オレはオレなんだよ」と叫んだとしよう。隣りにいる友人がそれを受けて「そうでお前はお前だ」と調子を合わせてやったとする。これらのやり取りに含まれている命題の形式は伝統的論理学の見地から言えば「AはAだ」ということでしかないけれども、それがこの対話の〈真理〉かと言えば、そうではないだろう。上司に叱られたのか、奥さんとケンカしたのか知らないが、Aという男の同一性(アイデンティティ)はいま揺らいでいる。その揺らぐアイデンティティを確認したくて、Aは「オレはオレだ」と言う。自己同一性を確認したいというそのAの欲望に応じてあげて、友人は「そうでお前はお前だ」と言ってあげる。ここには欲望の反射、共鳴がある。これがこの対話の〈真理〉である。AがAであるということが言われなければならない背景には、AがAであるということが揺らいでいるという事態があるのだ、ということ弁証法は言おうとしている。(野尻 2014:106-107)

要するに、弁証法とは、当たり前だと思われているもの、「 $A=A$ 」と見なされているものを展開することで、そのものが本当は持っている重層性(「 $A=A'$ 」)を反省的に確認する思考方法なのだ。「オレはオレである」という言明には、「オレはオレではないのではないか」というアイデンティティの揺らぎが含まれているのである⁽²⁾。そして友人が「お前はお前だ」と肯定してあげることで、「オレ」はアイデンティティを回復しているのだ。このようなことを反省的に確認することが弁証法なのである。「なっている(である)」と思われていることを展開してみると、そうで「ある」という肯定的な側面だけでなく、実は、そうでは「ない」という否定性が含まれていて、全体としては決して単純なものではなく重層性があるということが確認で

きる。この思考のプロセスが弁証法なのである。つまり弁証法とは、ある概念について反省的に再検討を加えることなのである。

居酒屋の例え話に則るならば、「オレ」は「オレではないのではないのか」という否定的な思いが高まってアイデンティティが揺らいでいるので、この事態に勤づいた友人は「お前はお前だ（＝ある）」ことを追認してあげることで、「オレ」が心の中のバランス（「オレはオレである」）を取り戻せるように配慮しているのである。

この一連の思考の流れを図示すると、以下のようになる。



図2：弁証法の構造

第3章で取り上げる和辻哲郎の「人間」観も弁証法的なものであるが、和辻の弁証法の理解は一般的に流布している「進む」という理解ではなく、野尻氏のような「戻る」弁証法により近い理解をしていることに注意してもらいたい。

3. 和辻哲郎の弁証法的な人間観

「間柄」の境地を研究の中心に据えながら、独自の人間観を提示してきた和辻は「人間」という言葉について、この言葉が辿った歴史的な経緯を踏まえた上で、次のように述べている。

「ひと」という言葉は自、他、世人等の意味を含蓄しつつ、すでに世間という意味をさえも示唆しているのである。(中略) 人間は単に「人との間」であるのみならず、自、他、世人であるところの人の間なのである。が、かく考えた時我々に明らかになることは、人が自であり他であるのはすでに人の間の関係にもとづいているということである。(和辻 2007:21-22)

人の全体性(すなわち世間)を意味する「人間」が、同様に個々の「人」をも意味し得るということは、いかにして可能であろうか。それはただ全体と部分との弁証法的関係によるほかはない。(中略) 一人の人といえどもそれが人である限り、すなわち言葉を持つ限り、社会を個人において現わしているのであり、従って人間と呼ばれてよい。(中略) 人間とは「世の中」自身であるとともにまた世の中における「人」である。従って「人間」は単なる人でもなければまた単なる社会でもない。「人間」においては両者は弁証法的に統一せられている。(和辻 2007:27-28)

ここで和辻は弁証法という言葉をも、正・反・合、つまり、テーゼとアンチテーゼが矛盾を解消してジンテーゼというより高次の命題に達するというような俗用された意味では使用していない。むしろ、野尻氏と同じように弁証法を反省作用という意味で使用している。

和辻は、「人間」は「世間」「世の中」「社会」という全体性であり、かつ個々の「人」や個人でもあるとしている。つまり、和辻は全体性と個別性の両方を含めて「人間」を論じているのである。これは個別性と全体性を止揚すると「人間」という高次のものになる、ということではなく、「人間」には初めから個別性(単なる人)や全体性(社会)が止揚されていると和辻は説明しているのである。西欧近代的な個人と社会(個と全体)を明確に区別

する人間観とは異なる、人間とは個人と社会の両方を含んだ重層的なものであるという人間観を和辻は提示しているのだ。

また、専修大学名誉教授であった哲学者の市倉宏祐は、和辻の「間柄」を捉えた人間観について次のように述べている。

人間の個別性を規定しようとするれば、間柄の全体によらざるをえなかったが、その全体を規定しようとするれば、個別性によらざるをえない。〈人間であること〉は端的な個別性でも、端的な全体でもない。間柄の中で、両者を二つの契機として己の内に含んでいるのが、人間の存在なのである。(市倉 2005:129)

この叙述については、和辻の人間観を総合的に記したものだ。市倉によれば、和辻は「人間」は個別性と全体性を「間柄」の中に両方含んだ存在と解釈したのである。

和辻の言う「間柄」とは、一言で言うならば「人間関係」である。「人間関係」を意味する英単語は **relationship** で、**Amity** の英英辞典における意味は **a good relationship** であるが³⁾、本論考では **Amity** を「人間関係」つまり **relationship** と同じ意味で使用しているので、本論考の定義では **Amity** も「間柄」ということになる。

筆者が唱えたアマタリアンの概念は、和辻の「人間」論と驚くほど類似している。志水氏はアマタリアンを「孤立した『個人』ではなく、また共同体に縛りつけられた『人間』でもない」としていたが、これは和辻が言う「人間」の姿と重なる。志水氏は共同体に縛り付けられているのが「人間」で、アマタリアンが「人」と定義してはいたものの、これは言い回しの違いに過ぎない。要するに志水氏の「人」に相当するものが和辻の「人間」なのである。

ここまでの議論を整理すると以下のようなになる。

アミティ **Amity** = 間柄 (人間関係)

アマタリアン **Amitarian** = 人間 (志水氏が言うところの「人」)

和辻は、「世間」(「世の中」)や「社会」が「共同態」と関連していることを叙述している(和辻 2007:35-37)。そのため「世間」「世の中」「社会」と

いう言葉は、共同体 Community という言葉とも置き換え可能であろう。また前掲の引用で和辻は「世間」「世の中」「社会」を全体性として規定していたので、和辻に則れば Community は全体性の境地に存在するものであることになる。

また、和辻は前掲の引用で個々の「人」つまり個人 Person を「部分」と叙述していた。市倉は「部分」ではなく「個別性」と言っていたが、内容としては同じことである。

ここまでの議論を整理すると以下のようなになる。

世間・世の中・社会 = 共同体 Community = 全体性

個々の「人」 = 個人 Person = 部分・個別性

和辻の、「人間とは『世の中』自身であるとともにまた世の中における『人』である。従って『人間』は単なる人でもなければまた単なる社会でもない」という叙述の、人間を Amitarian に、人を Person に、世の中と社会を Community にそれぞれ置き換えてみる。

すると、「Amitarian とは Community 自身であるとともにまた Community における Person である。従って Amitarian は単なる Person でもなければまた単なる Community でもない」となる。

あるいは、市倉の「〈人間であること〉は端的な個別性でも、端的な全体性でもない。間柄の中で、両者を二つの契機として己の内に含んでいるのが、人間の存在なのである」という叙述の、人間を Amitarian・間柄を Amity・個別性を Person・全体性を Community にそれぞれ置き換えてみる。

すると、「〈Amitarian であること〉は端的な Person でも、端的な Community でもない。Amity の中で、両者を二つの契機として己の内に含んでいるのが、Amitarian の存在なのである」となる。

ここまでで確認してきたように、「人間=Amitarian、間柄=Amity、個別性=個人=Person、全体性=世間・世の中・社会=Community」というように、和辻の主張をアマタリアンの用語で説明しなおすことができる。

市倉によれば、和辻は「間柄」には社会・世間といった全体性と、個人という個別性が上揚されているということを見出したとのことであった。つ

まり、「間柄」の境地から人間という存在のあり方を探求すると、世間・世の中・社会という全体性の要素と、個人という個別性の要素という一見対立しそうな側面が人間の中で共存している、ということが反省的に明らかになるのである。

そして、人間を Amitarian、間柄を Amity、世間・世の中・社会などの全体性を Community、個人という個別性を Person と置き換えるなら、Amity や Amitarian には Community と Person が止揚されているという弁証法的な関係が示されるのである。

この弁証法的な三位一体の関係を図示すると、以下のようになる(図3)。

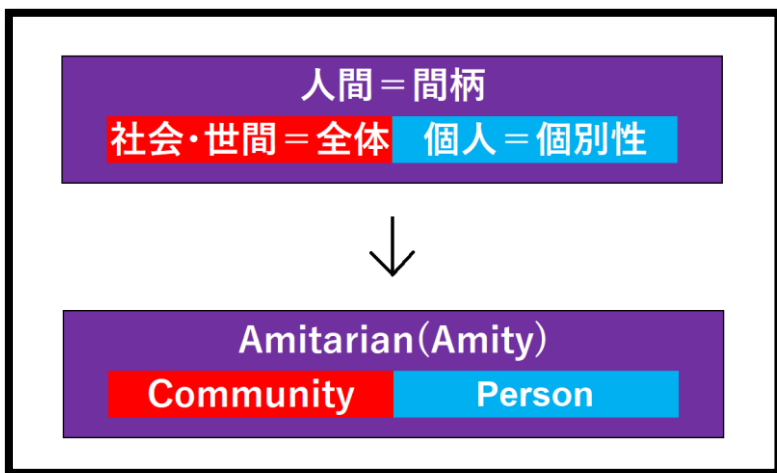


図3：弁証法的な人間観の構造

和辻の叙述を援用することで、リバタリアンが前提とする個人と、コミュニタリアンが前提とする共同体(コミュニティ)は、実はアミティの内に含まれる背中合わせの要素であるということが主張できるようになる。

これを起点として、個人 Person と共同体 Community が止揚されている間柄 Amity の境地から、稲場氏が指摘するようなリバタリアンとコミュニタリアンの対立を解釈しなおすことができると筆者は考えている。つまり、個人の自由を優先するのか、それとも共同体の共通善を優先するのかという

対立を退け、間柄という視座に立脚した新しい問いを立てることができるのではないか、ということだ。これがアマタリアンという人間観が問いかける課題である。人間は共同体の一員という単なる全体性の中のひとつの要素でもなければ、孤立した個人という単なる個別性でもなく、両方の契機を併せ持つ重層的な存在であるということを経験的な事実と捉えて、人間のあり方を考えなおすことには意義があるのではないだろうか。

間柄とは人間関係のことであるので、アマタリアンの問いとは「関係についての問い」ということになる。ただし、それは個々の「人」である他者との関係に留まらず、共同体・社会という全体性の要素を帯びた他者との関係も含んだ、総合的な人間関係についての問いである。

4. 和辻倫理学への批判

ここまでは和辻の弁証法的な人間観に則って議論を展開してきたが、和辻の哲学にも批判すべきところがある。

ひとつは、和辻が個別性（個人）と全体性（世間・社会）が間柄を通じて一体となっているという思想を、皇国史観あるいは尊皇思想などに結びつけるという過ちを犯したことが挙げられる。和辻のこのような叙述や言論は、大東亜戦争の理論的な後押しにもなった。

皇国史観や尊皇思想を重視していた和辻は、最も高次の全体性が国家であるとし、国家と一体になることこそが人倫であるという論を、教育勅語などを絡めながら展開し、結局は個人に対する国家優位の思想を展開した（高橋 1997:15-16）。この思想への筆者の疑念は次の二点で、なぜ最も高次の全体性が国家なのかということと、なぜ個人という個別性に対して、国家という全体性が優位なのかということである。「世界」を最も高次の全体性として措定するのなら理解できるが、国家を措定してしまうのは尊皇思想に接続するための恣意的な論考だったのではないか。また、個別性に対して全体性が優位であることを和辻は示唆したが、個別に対して全体が優れるという優劣の判断も恣意的である。人間が併せもつ個別性と全体性の契機のうち、全体性に重きを置いたそのときに、全体主義思想が展開される端緒となるのだ。

和辻は間柄という境地から切り取った人間観を、全体主義的な国家観を国民に植え付けるために政治利用した。間柄の境地を見抜いておきながら、結局は日本国や天皇という全体性に個人を絡め取ろうとする全体主義思想へと転化させた。これが、日本が戦争をするにあたっての理論的・哲学的な裏付けとなったのであるから、間柄的存在における人間観は全体主義思想に転化しやすい、ということには警戒する必要がある。

しかし、間柄が社会や共同体のような全体性と個人という個別性の両方を統合している概念であるということそれ自体は純粹に哲学的な人間観として、政治性を帯びさせずに取り扱うことは可能である。アマタリアンという概念についても、まずは政治性を排除し、価値中立的に間柄的存在における人間観を取り出すことから始まる。その後、間柄的な存在である人間は他者とどのように関係を取り結びながら一人の個人として生きるか、あるいはどのような社会を目指すべきかという政治的な話題について考究する、つまりアマタリアニズム論を展開するという手順を踏まなければならない。

共同体という全体性を優先するコミュニタリアンも、個人という個別性を優先するリバタリアンも、価値判断を含んだ人間観の上で議論を展開しているのである。そうではなく、人間はそもそも全体性と個別性の両方を併せ持った存在（つまりアマタリアン）であるという事実を出発点とし、その前提の上で望ましい個人のあり方とは何か、あるいは望ましい社会や共同体とは何かという問いを立てていくことがアマタリアニズムという政治哲学の立場が目指すものである。加えて、人間の本質的なあり方が他者との関係にあるならば、望ましいつながりのあり方とは何かという根源的な議論もアマタリアニズムが検討すべき課題である。

和辻は国家という全体性に固執して全体主義思想を展開してしまったが、その過ちを理由に彼の鋭い人間観を全否定するべきではない。和辻の間柄的存在における人間観が孕む全体主義への親和性を認識しつつも、彼の思想を批判的に継承していくという態度を取ることが重要なのである。

もう一つの批判として、和辻が間柄的存在における人間観から自然を排除したことが挙げられる。和辻は「人間とは、人の世界を意味する。人の世界とは人間社会のことであって人を取り巻く自然界のことではない」（和辻2007:23）と叙述している。仏典に忠実に思想を組み立てたために、仏典中に含まれない要素である自然を排除し、自然と相互関係を取り結ぶ人間存

在を和辻は否定したのである。後に和辻が「風土」つまり国や地域ごとの自然環境が人格に与える影響を研究したことを考えるとこれは意外である。

人間は自然の間に存在する生物であるのだから、仏典から多少外れても、和辻は人倫の体系に自然を組み込むべきではなかったか。ただし、和辻の時代には環境倫理学がまだ盛んであったわけではなく、地球環境問題や気候変動のような問題も表面化してきていなかった。だからこそ、自然環境と人間との関係を人倫の体系に組み込むという発想が和辻から出て来なかったのは仕方がないことだったのかもしれない。

和辻の人倫観を現代に則して解釈しなおすのであれば、全体主義的色彩を脱色すると共に、先鋭化する環境問題と向かい合うため、自然環境という他者を人倫の体系に組み込むことも重要になると筆者は考える。

5. 間柄的な人間論の先行研究

ここまでのような弁証法的で間柄的な人間観を提示すると、日本人の人間観が独特であるという日本特殊論だと思われるかもしれない。あるいは、日本特殊論とまではいかなくとも、アマタリアン概念は日本論であると思われるかもしれない。

実際、和辻は間柄的存在における人間観が日本や東洋だけの特殊なものであると捉えていたようであるし、和辻と同じように間柄的な人間論を展開した先行研究には日本論として叙述されたものがある。しかし、筆者がアマタリアンの概念で主張していることは日本特殊論や日本論ではない。むしろ、筆者が主張したいのは、どの国や地域の人間でも「間柄において個別性と全体性が含まれている」存在であるということだ。

人と人との関係、間柄に着目した人間観についての先行研究は、和辻のものが体系立っているが、和辻以外にも秀逸な成果を残したものがある。ここからは、和辻以外の間柄に着目した人間観の先行研究と比較検討することで、アマタリアン概念の輪郭をよりはっきりとさせていきたい。

和辻と同じように間柄に着目し、精神科医の視点からあくまで日本論として研究を行ったのが木村敏である。木村によると、自己が成立するのは自己ではない存在と出会った瞬間であるが、自己ではない存在が成立するの

も同じ瞬間であり、両者を同時に成立させる何かがある間に存在するという。木村はその何かを「人と人との間」と呼称した（木村 1972:14-15）。

木村は「人と人との間」なるものは生命力のようなものであるというが（木村 1972:18）、アマタリアンの哲学では、自己と自己ではないものを同時に成立させる生命力のようなものよりも、自己が自己ではないものとの関係において成立しているという事実には重きを置く。

また、木村によると「人と人との間」が日本人に特有な水平的な世間重視の人間性を形成していて、西洋の人々の神との垂直的な結びつきを重視した人間性とは大きく異なっているという（木村 1972:77）。このような木村の人間観や、和辻の哲学に影響を受けた社会学者の浜口恵俊は、個人主義的な西洋の人々に対して、東洋の人々に特有の人間観を「間人主義」という言葉で説明している。浜口は「相手をおもんばかって行動することが「間人主義」の神髄」（浜口 1982:7）とし、西洋の人々がもつ「自己依拠的態度を重んじ、自我確保のために対人関係を手段視する『個人主義』とは、まったく対照的な価値観」（浜口 1982:30）という。つまり、他者に頼り、頼られる相互依存を善とするのが東洋的な人間観であるというのである。浜口の人間観も、木村と同じで日本を含む東洋と西洋の差異を強調するものであるといえる。

筆者も、日本の人々が世間への配慮に強い関心を持つ傾向があることに同意するが、筆者が主張するアマタリアンとは、世間への配慮を重んじる生き方のことではない。間柄 Amity という境地を主張しているからといって、狭苦しい世間に埋没するべきであるということこそ筆者は主張したいわけではないのである。無論、世間体を気にするような人間のあり方をアマタリアンという造語に託して推進したいわけでもないし、同調圧力が強く働くような世間が重要であるなどと主張したいわけでもない。

もちろん、他者への配慮を重んじるあり方を否定するということではないし、相互に助け合う人々の暮らし方を他者への甘えであるといって糾弾することもない。しかし、アマタリアンはこのような日本や東洋の生活態度を称揚するものではない。筆者がこの概念で主張したいことは、個人と社会はきっぱりと分割できるようなものではなく、間柄つまり Amity という個人と社会どちらでもない、いやむしろ、どちらでもあるような境地が存在しているという事実である。そしてこの Amity の境地は日本や東アジア圏以

外の、欧米を含む世界中にも共通して存在する純粋な事実であるということだ。普遍的な人間観として想定すべきなのは、個人（個別性）と社会（全体性）がきっぱりと分かれたようなあり方ではなく、それら両方を含み込んだ重層的なあり方なのである。

個人主義の伝統があるとされる欧米人はとりわけ個人と社会を分けて考える傾向があり、それに比べると（近年は個人主義化が進んでいるとも言われるが）日本人は世間を気にしがちのようだが、それは程度の問題であり、欧米人も日本人も社会・個人そして間柄（人間関係）それぞれへの眼差しを持っている。アミタリアンの哲学は、洋の東西を問わず人間は他者との相互作用の中で存在し得るものであるという事実に依拠する。だから、アミタリアンの哲学は他者との関係を捨象して確固たる個人を主張することを退け、かつ人間関係を取り結ぶ場になるからといって共同体それ自体を称揚することもないのである。

実は木村や浜口が日本論あるいは東洋論として叙述したことの中には、アミタリアンの人間観と重なるものが含まれている。例えば木村は、「自己が自己ならざるものに出会った、まさにその時に、ぱっと火花が飛散のように、自己と自己ならざるものがなにかから生じる」（木村 1972:14-15）と自己と他者の相互関係について叙述している。自己と他者が相互関係を結ぶという事実はアミタリアンの人間観にも含まれるものであるが、こういった自己と他者の関係構築のあり方が日本や東洋にだけ当てはまることだとするのは不自然である。むしろ、木村の叙述は人間一般に当てはまる認識論的な事実であるとするのが自然ではないか。

また、浜口は東洋について「確固とした自我意識を核にするパーソナリティではなく、社会的な相互作用を内に含む柔軟なパーソナリティ」をモデルとして社会の分析を行うべきであると主張している（浜口 1982:10）。浜口の主張する「社会的な相互作用を内に含む」パーソナリティについても、西洋の人々はより確固たる自我意識を持つ傾向があるのだと仮定したとしても、社会的な相互作用が西洋では自己形成に全く影響を与えないということにはならないはずだ。なぜなら、西洋の人々が個人主義的な確固たる自我意識を持っているとしても、それも西洋の社会の中で生まれ育ってきた中で自然と身に付けてきたエートスだからである。

木村や浜口は、和辻の影響を受けて間柄的な人間論の研究を深めてきた

のであるが、その成果はあくまで日本論として提示されていた。確かに、日本や東洋と西洋諸国では文化やパーソナリティに異なる傾向があるのは事実かもしれない。しかし、彼らの議論の中には日本や東洋以外にも当てはまるような間柄的な人間論があり、アマタリアンの哲学ではそういった人間論を人間一般のあり方として捉えなおすことになる。

6. 人々がつながることができる場についての先行研究

アマタリアンという思想が、人間の本質的なあり方は他者との関係（＝間柄）にあるとして、つながりを重視するものであるならば、アマタリアニズムが他者との関係やつながりに何を期待する政治哲学なのかについても明らかにしておく必要があるだろう。このことに関して、先行研究との比較検討の中でその輪郭を明らかにしていきたい。

個別性と全体性、あるいは個人と社会という両者を弁証法的に含み込んだ存在としての人間は他者との関係の中でしか生きられないものである、という事実を認識した上で、アマタリアニズムは他者とのつながりにより個人と社会の双方にアプローチする哲学となる。ここで考えるべきなのは、人間どうしがつながる場がどのような場であるかということだが、それは個人の側に寄り過ぎた私的な場ではなく、反対に社会に寄り過ぎたオフィシャルな場でもないだろう。

公と私の間にある空間を論じた先行研究としては、ハーバーマスらが論じた「公共圏」の研究が挙げられる。ハーバーマスによると18世紀の西欧においては、市民社会（市場）や家族空間などの私的（民間）領域と、国家などの公権力の領域のあいだに、「公共性の空間」が存在したという。ただし、「公共性の空間」は「民間人の公共性」であるので、私的領域により近く、公権力の領域との隔たりが大きいという（ハーバーマス 1994:49）。「公共圏」も「公共性の空間」の系譜に連なるものである。つまり、国家に直接的に介入されずに政治的討論が行われるコミュニケーションの場が「公共圏」である。

この「公共圏」は確かに公と私のどちらでもない場であるので、この点ではアマタリアニズムが称揚する場に近い。しかし、アマタリアニズムが称揚

する場で重要なことは複数の人間がつながることであり、必ずしも「公共圏」のように政治性を帯びた場である必要はない。

では、複数の人間がつながることができる場とはどのような場だろうか。こういった場については、見田宗介が「交響体」と呼んだ場が参考になる。見田は社会を、人格的な関係⇔脱人格的な関係の横軸と、自由な意志による関係⇔意思以前の関係の縦軸の、二つの軸により四象限に分類する（見田 2012:16）。これらの中で、人格的な関係かつ自由な意志による関係、に当てはまる社会が「交響体」である⁽⁴⁾。

アマタリアニズムが称揚する場もこの「交響体」に近いと言える。ただし、意思以前的に関係を取り結ぶ場ではなく、自由な意思をもって集まる場であったとしても、その意思は確固たる意思である必要はない。お寺の集まりや地域の子ども会のような、なんとなく参加している人たちも多い場も複数の人間がつながる場となりうる。アマタリアニズムが称揚するのは、ゆるやかな意思で集まることも排除しない「交響体」というのが一番近いと言える。

アマタリアニズムが目指すものは、「交響体」のような場を充実させていき個人と個人のつながりが充実した社会をつくることで、人々が支え合いながらクオリティオブライフを向上させていくことである。これは志水氏が「アマタリアンは、自分のまわりに『アミ』＝ネットワークを築ける人でもある。そのネットワークは、それを構成する諸個人にとっての物質的・精神的な『セーフティーネット』たりうるであろう」（志水 2020:202）と叙述したことにも重なってくる。

ここで注意すべきことは、「交響体」のような場において、人々が関係を取り結ぶこと自体が重要なのであり、場そのものの価値が高くなりすぎるような本末転倒な事態になってはいけないということである。また、人々が孤立しないような社会の実現のために、人々のつながることのできる場の充実を目指すとしても、個人に他者とつながることを強要することもあってはならない。つながりのある社会を乱暴なやり方ではなく実現させるためにはどうしたらいいのか、ということを考えていくこともアマタリアニズムが考究していくべき課題となるであろう。

7. おわりに：アマタリアンの意義について

最後に、現代においてアマタリアンあるいはアマタリアニズムにどのような意義があるのかを、手短にだが確認しておきたい。

20 世紀末以降、新自由主義的資本主義社会の下で、アトム化した個人の不安定な心に国家がナショナリズムを煽るという現象が世界各地で起こっている⁽⁵⁾。人間は他人とのつながりから遊離すると、生活の基盤やアイデンティティが不安定になるが、このような心の隙を突いて、国家のような大規模な共同体が個人を絡め取ろうとしているのである。

このような現象については、社会学や心理学の古典で様々な学者が、様々な名称や論じ方で分析しているが、なかでもドイツの社会学者マンハイムの「甲羅のない蟹」という詩的な表現が含意する洞察が鋭い。マンハイムは「社会集団の庇護の下にあるひとびとには」ナチズムの影響力が届かないことをヒトラーは理解していたために、「個人の所属している集団を解体することによって、心のなかにある抵抗力を破壊する」ことで独裁体制を構築したと分析した（マンハイム 1954:135）。現代では、ナチスのような社会集団を攻撃する政治的組織の存在よりも、新自由主義による市場原理の徹底で人々が個人の単位に解体され（アトム化）、社会集団が弱体化していることで、「甲羅のない蟹」となった人々が発生している。そういった人々が政治家などによりナショナリズムを煽られるような事態が起きている国が少なくないのだ。

こういった時代にあって、アマタリアニズムが充実を訴える。人と人がつながることができる場は代替の「甲羅」となり、「心のなかにある抵抗力」の役割を果たしうる。そういった場でアマタリアン的な志向を持つ人々が自由闊達につながることで、全体的なものに絡め取られにくい社会を構築することに役立つと筆者は考えている。

さらに、ナショナリズムが先鋭化し国家間対立や民族間対立が深刻化することになれば、国境や民族を超えてつながることを厭わない人たちの存在が重要になる。そういった人たちの活動を思想的に応援することもアマタリアンが掲げていくべき哲学の役割である⁽⁶⁾。

また、21 世紀の現代の課題に、都市化により古くからの共同体が衰退し

たことで共助が弱くなったことが挙げられる。それにも関わらず、世界では気候変動が激甚災害の頻度を高めていくことが予測されていて、日本については近い将来に巨大地震が発生することも予測されている。

こういった時代に、人間の本質的なあり方は他者とつながることだと捉えるアマタリアン的な志向をもつ人々は、人とのつながりの中で互助関係を取り結ぶことができるであろう。

さらに、アマタリアニズムは、つながることができる場を充実させることで人々が支え合うことができる互助社会を築いていく取り組みの、哲学的な後ろ盾となることができるであろう。

以上のように、現代は人々のつながりや人と人がつながることができる場の拡充が非常に重要になっている。アマタリアンやアマタリアニズムは、こういった時代に対応する思想となりうるのである。

注

- (1) この図では黄色い領域で表した共同体が、コミュニタリアンでは一つだけ大きなものとなっていて、アマタリアンでは小さなものが複数となっている。このような描き方をした意図としては、コミュニタリアンが国家や民族などの大規模な共同体へ帰属する中で共通善について考えることに重点を置く傾向があることに対して、アマタリアンは共同体のもつ伝統や価値観を尊重するが、大規模な共同体への所属に拘らず、他者とつながること自体に重点を置いている、ということを強調したかったためである。一人の人間でも複数の共同体や社会に所属していることは珍しくなく、企業、国家などの大規模なものから家族のような身近なものまで規模も多様である。
- (2) 本論考における強調は全て筆者による。
- (3) Cf. Cambridge Dictionary より *amity* の項目
<https://dictionary.cambridge.org/ja/dictionary/english/amity> (2021/8/21 アクセス)
- (4) 交響体以外の社会については、人格的な関係かつ意思以前の関係を共同体(家族・氏族・村落など)、脱人格的な関係かつ自由な意志による関係を連合体(会社・協会・団体など)、脱人格的な関係かつ意思以前の関係を集列体(市場において個々の利害関心で自由に行動する場合など)と見田は定義している(見田 2012:15-17)。
- (5) 顕著な例としては、アメリカ南部に住む白人のナショナリズムを煽ることで一定の支持を得ている前米大統領のドナルド・トランプが挙げられる。こういったことを丹念な聞き取り調査で明らかにした、社会学者 A・R・ホックシールドの著作が参考になる。ホックシールドは衰退してしまった昔の地縁的・血縁的な共同体に戻るべきだと主張するアメリカ南部の白人を取材しているが、こういった喪失感を抱えた南部の白人が、ナショナリズムを煽るトランプの支持基盤に含まれているようだ(ホックシールド 2018)。

- (6) 時代は多少古いものの、和辻が間柄的存在における人間観を、国家や天皇という全体性に個人を絡め取ろうとする全体主義思想へと転化して太平洋戦争を理論的に後押ししたこともナショナリズムの扇動であったと言える。しかし、アマタリアンの哲学は和辻の間柄的存在における人間観から影響を受けているが、和辻のように個人が国家などの全体性につながっていることを礼賛するのではなく、間柄つまり人間関係やつながりそのものに人間存在の本質があると考え。そして、つながりやつながることができる場の拡充は、マンハイムが言うところの「甲羅」となりうるため、むしろ全体を指向する思想と対峙して歯止めとなりうる、と筆者は考えている。

参考文献

- 市倉 宏祐 2005『和辻哲郎の視圏』春秋社。
- 稲場 圭信 2020「共生社会にむけての共創——宗教と科学技術による減災のアクションリサーチから」志水宏吉・河森正人・栗本英世・檜垣立哉・モハーチ、ゲルゲイ（編）『共生学宣言』pp. 193-213、大阪大学出版。
- 木村 敏 1972『人と人との間——精神病理学的日本論』弘文堂。
- 志水 宏吉 2020『学力格差を克服する』ちくま新書。
- 高橋 浩 1997「和辻哲郎と15年戦争—和辻の思想的特質とその問題点をめぐって—」鹿兒島女子大学研究紀要 19(1):13-30。
- 野尻 英一 2014「美と弁証法」『エステティーク』創刊号:104-111、日本美学研究所。
- ハーバーマス、ユルゲン 1994『第2版 公共性の構造転換——市民社会の一カテゴリーについての探求』細谷貞雄・山田正行訳、未來社。
- 浜口 恵俊 1982『間人主義の社会 日本』東洋経済新報社。
- マンハイム、カール 1954『現代の診断』高橋徹・青井和夫訳、みすず書房。
- 見田 宗介 2012「『社会』のコンセプトと基本のタイプ」『定本 見田宗介著作集Ⅶ——社会学の主題と方法』pp. 14-19、岩波書店。
- ホックシールド、A・R 2018『壁の向こうの住人たち—アメリカ右派を覆う怒りと嘆き』布施由紀子訳、岩波書店。
- 和辻 哲郎 2007『人間の学としての倫理学』岩波文庫。
- Cambridge Dictionary HP (amity の項目)
<https://dictionary.cambridge.org/ja/dictionary/english/amity> (2021/8/21 アクセス)